



**Data** 2023-108

監督・脚本: ステファン・ルツォヴィツキー  
出演: ムラタン・ムスル/リヴ・リサ・フリース/マックス・フォン・デル・グローベン/マルク・リンパッハ/マルガレーテ・ティーゼル/アロン・フリエス

## 👁️👁️ みどころ

ハプスブルク家、オーストリア=ハンガリー帝国、ウィンナー・ワルツ等は、すべて華やかな“ウィーンの都”を想起させる言葉だが、第1次世界大戦で敗戦国になった国の帰還兵はみじめなもの。日本のそれは、田村泰次郎の小説や映画『肉体の門』が典型だが、本作の主人公たちがロシアの捕虜収容所から故郷のウィーンに帰還してみると・・・？

本作では第1に、全編ブルーバック撮影による荒廃しきった都ウィーンの歪んだ姿に注目！そして第2に、次々と帰還兵たちを襲う、何とも残忍な猟奇殺人事件（の動機・背景）に注目！その犯人は一体ダレ？

“名探偵シリーズ”ならその鮮やかな解決ぶりが見どころだが、本作は、さにあらず！ウィーン生まれのステファン・ルツォヴィツキー監督が本作で見せる“世界観”をしっかりと確認したい。そのためには、“ドイツ表現主義”を含む多くの勉強が不可欠だが、それも映画鑑賞の楽しみの1つと心得たい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■この国籍の監督に注目！前作に続く問題提起は？■□■

本作の脚本を3人の共同で書き、監督したのは『ヒトラーの贗札』（06年）（『シネマ18』26頁）で、第80回アカデミー賞外国語映画賞を受賞したステファン・ルツォヴィツキー監督だ。同作は“実録歴史ミステリー”と位置付けられているが、彼の国籍はドイツではなく、かつて栄華を誇り、ウィンナー・ワルツで有名なオーストリアで、生まれはその首都のウィーンだ。ハプスブルク家の君主が統治した「オーストリア=ハンガリー帝国」は、日本の明治維新と同時期の1867年に、従前のオーストリア帝国がいわゆる「アウスグライヒ」により、ハンガリーを除く部分とハンガリーとの同君連合として改組されることで成立し、第1次世界大戦で敗北した1918年に皇帝が廃止され、共和国に移行するまで続い

た。その前身はオーストリア帝国だ。

日本人はそんな歴史をほとんど知らないだろう。しかし、1961年にオーストリアのウィーンに生まれたというステファン・ルツォヴィツキー監督には、「歴史の流れが人々の心を揺さぶり、今までの価値観や信念を保つことができなくなる。」ということが、常に心の中に抱いていた根源的なテーマだったらしい。日本でも、太平洋戦争終了後、復員してきた元兵士たちの荒廃した心をテーマにした映画や小説はたくさんあり、その代表は田村泰次郎の『肉体の門』(47年)だ。そこでは「金をもらわずに男と寝ない」という厳しい掟の中で生きるパンパングループの中に、ある日、怪我をした1人の復員兵が潜り込んできたことによって起きる、さまざまな男女関係の絡みや人間模様が描かれていたが、本作の主人公も復員兵のペーター・ペルク(ムラタン・ムスル)だ。

本作冒頭、長く苦しいロシアでの捕虜収容所生活からようやく解放されたペーター中尉が、数名の部下たちと共にドナウ川を進む船に乗って故郷に戻る情景が描かれるが、その悲惨さは敗戦後の日本以上！？

## ■□■全編ブルーバック撮影！その効用は？監督の狙いは？■□■

せっかく期待していた運動会が、大雨のために中止。そんな悲しい思い出は誰もが持っているだろうが、映画撮影を室外でやる場合は、天候に左右されるから大変だ。例えば、「関ヶ原の戦い」を撮影するため、東西両軍の出陣陣をエキストラ共々、鎧兜姿で1000人規模で準備していたのに、雨が降り始めたため、急遽「撮影中止」という事態になると、その損失はHow much？

そんなことを考えると、ブルーバック撮影は便利なものだ。ウィキペディアによると、ブルーバックとは「映像、表示などにおいて、背景(バックグラウンド)が青い色をしている状態のこと。」「青い背景(ブルーバック)の前で人物などを撮影し、ブルーの部分に別に用意された背景を合成する」ものだ。1956(昭和31)年、『白夫人の妖恋』(東宝)で特技監督の円谷英二によって、日本映画界で初めてこの合成手法が用いられたそう。

また、『映画検定公式テキストブック』(06年)では、ブルー・スクリーンは、「SFXの技法のひとつ。俳優がモノクロ(通常ブルーあるいはグリーン)の背景の前で演技し、ポスト・プロダクションの段階で、背景部分に別映像やCGIを合成。」と解説されている。言われてみれば、なるほどと理解できるが、いかに有能な俳優とはいえ、例えば、喧嘩相手がいないのに、いかにそれが目の前にいるかのように演じていかなければならないのだから、それはそれで大変だ。

しかして、本作冒頭、ペーターたちの復員兵グループは、ブルー・スクリーンの前で部下の1人が死んでいく状況を悲しみを込めて演じたが、スクリーン上でそれを観る私たち観客の目には、ペーター達に乗っている船とそのバックにドナウ川沿いの風景が映っているからすごい。そして、何とか無事、故郷のウィーンに戻ってきたペーターたちの背景には、多くの建物が焼け落ち、荒廃しきった首都ウィーンの街並みが映っている。ステファ

ン・ルツォヴィツキー監督はパンフレットの「監督コメント」の中で『ヒンターラント』は、ほぼ全編をブルー・スクリーンで撮影していますが、それは本質的に歪んだ世界、いわばサイレント映画の傑作『カリガリ博士』（1919）のデジタル版を描こうという挑戦でした。実際に主人公たちの背後に映る世界の多くは、表現主義的な歪んだ背景を採用しています。つまりそれは、この苦痛に満ちた猥雑で残忍な男たちの世界と、心身共に傷を負った主人公たちの複雑な心象風景との間に、刺激的な調和を生み出そうという試みだったのです。」と述べているが、なるほど、なるほど。

## ■□■表現主義とは？ドイツ表現主義とは？こりゃ難解！■□■

前述の監督コメントでステファン・ルツォヴィツキー監督は「表現主義的な歪んだ背景を採用しています。」と述べているが、“表現主義”って一体ナニ？それはパンフレットの注)では「20世紀初頭ドイツを中心に広がったアートの潮流。英語では「Expressionism」となり、人間の内面を表現しようとする試みとして、五感で感じられる外界を表現する「Impressionism（印象主義／印象派）」と対比される。」と解説されている。

また、ウィキペディアによると、「表現主義または表現派は、様々な芸術分野（絵画、文学、映像、建築など）において、一般に、感情を作品中に反映させて表現する傾向のことを指す。」と解説されている。さらに、「ドイツ表現主義は、20世紀初頭にドイツで起こった一大芸術運動である。この感情表現を中心とする手法は、当時、他のヨーロッパの国々で盛んであった印象派（物事の外面的な特徴を描写する）とは対極に位置する。表現主義は、第1次世界大戦後すぐに、他の運動へと受け継がれていった。例えば、構成主義、新即物主義、そして後の抽象表現主義、超写実主義である。」と解説され、さらに「ドイツ表現主義の作品において、よく扱われるテーマは、生活の矛盾（性的なもの、家族間のものなど）から、革命、戦争、社会の矛盾など、いわば既存の秩序や市民生活に対する反逆を目指したものが多い。ドイツ表現主義においては、伝統的な芸術の様式は破壊され、また自然主義とは正反対の立場をとる。表現主義者は、ニーチェに思想的な影響をうけているとされる。」と解説されている。しかし、これらはいずれも難解だ。

本作を鑑賞するについては、これらの概念とその実態をしっかりと勉強した上で、ステファン・ルツォヴィツキー監督の“わが故郷ウィーン”に対する“思い”を“ドイツ表現主義”的に理解することが不可欠だ。

## ■□■復員兵たちの生活再建は？なぜ殺人事件が次々と？■□■

私の子供時代は“物乞い”同然の、いわゆる“傷痍軍人”の姿を見ることもあった。アメリカに占領され、国そのものが貧しい日本国の中での復員兵たちの生活再建が容易でなかったのは当然だ。そんな背景事情の中だからこそ、前記の『肉体の門』が大ヒットしたわけだが、本作に見るオーストリアへの復員兵たちの生活再建は？

かつての部下たちに対して“解散宣言”をしたペーターは1人で大きな屋敷に入ったが、そこに彼を迎える妻の姿がなかったのはなぜ？それはストーリーが進むにつれて少しずつ

明らかにされるが、こんな立派な帰る家があるだけ彼が恵まれていたことは、やっと戻ってきた故郷ウィーンでまともな「衣・食・住」にありつくことができない部下たちの姿を見れば明らかだ。命を懸けて戦ったのに、皇帝は国外へ逃亡し、兵士たちに対するねぎらいの言葉すらなかったから、彼らの国や皇帝に対する“喪失感”がとてつもなく大きかったことは想像に難くない。

それと同じような状況下、日本では『肉体の門』のような小説が大ヒットしたわけだが、本作では、ペーターと共に復員してきた元兵士を狙った残忍な殺人事件が1件、また1件と発生していったから、さあ大変。これらの殺人事件が偶発的なものではなく、何らかの意図を持った計画的なものであることは明らかだ。

その捜査に乗り出したのは、今やウィーン警察内で警視に出世しているヴィクトア・レンナー（マルク・リンパッハ）だ。そのヴィクトアは、かつての同僚で“切れ者刑事”だったペーターがウィーンに戻ってきていることを知ると、捜査陣への復帰を強力に勧めることに。さらに、被害者の遺体には相手に苦痛を与えることを目的として仕掛けられた拷問の跡があったから、法医学的な観点からの検視が不可欠。そこで、その任務に当たったのは、当時としては珍しい女性医師のテレザ・ケルナー博士（リヴ・リサ・フリース）だ。彼女の口から1つ1つの分析結果を聞くと、その痕跡は犯人もペーターと同じ帰還兵であることを告げていたが、なぜやっと復員してきた俺たちが、今こんな悲惨な目に遭わなければならないの？ペーターはもとより、ペーターと共にウィーンに戻ってきた戦友たちはみんなそう思ったのは当然だが・・・。

## ■□■捕虜収容所内の統治システムは？20人委員会とは？■□■

『人間の条件』全6部作（59-61年）（『シネマ8』313頁）や、劇団四季のミュージカル『異国の丘』（『シネマ1』98頁）を観ると、ソ連に抑留され、捕虜収容所に收容された元日本兵たちの“厳しさ”がよくわかる。そこでは飢え、寒さ、労働等の過酷さはもちろんだが、それ以上に大変だったのは、巧妙かつ陰湿な収容所内の捕虜統治システム。それは、『大脱走』（63年）や、『戦場にかける橋』（57年）（『シネマ14』152頁）で見た捕虜たちの姿とは真逆のもの。すなわち、その基本的な考え方は捕虜同士で捕虜たちの言動を監視させ、密告システムと処罰システムを確立することだ。

しかして、第1次世界大戦中におけるロシアの捕虜収容所内でも、そのシステムが確立され、“20人委員会”なるものがあつたらしい。したがって、万一、脱走者が出ると、その何倍かの捕虜たちが殺害されたが、それを統括していたのはロシア軍ではなく、捕虜仲間から選抜された“20人委員会”だったから、話はややこしい。その結果、捕虜たちの恨み辛みがロシア軍に向かず、“20人委員会”のメンバーに向かったのは仕方ないだろう。そうすると、今ウィーンで起きている猟奇殺人事件はそんな復讐心に基づくもの・・・？もしそうだとすると、第1、第2、第3の犠牲者に続いて起きる犠牲者は？

## ■□■若手刑事の兄弟愛は？主人公の夫婦愛は？■□■

一連の猟奇殺人事件をヴィクトアと共に捜査するのは、若手刑事のパウル・セヴェリン（マックス・フォン・デル・グローベン）。ヴィクトアが復員兵のペーターを重宝することが気に入らない彼は、何度も捜査の現場でペーターと対立したが、テレーザの口から、かつてのペーターの“刑事としての敏腕ぶり”を聞かされると渋々納得。パウルの兄は伍長として対ロシア戦に参加していたが、未だに戻っていないから、その生死は不明。したがって、パウルはわずかばかりの希望を持って兄の帰還を心待ちにしていたが、ペーターは、パウルに対してあっさり、「伍長は死んだよ」と告げたから、アレレ、アレレ・・・。

他方、ペーターの家を管理してくれていた隣家のおばさんの話によると、ペーターの妻は子供を連れて某所に住んでいるらしいが、それは一体なぜ？また、普通なら、それを聞いたペーターはすぐに妻子の元へ走るはずだが、ペーターがそれを先延ばしにしているのは一体なぜ？さらに、やっと妻の前に現れたと思ったら、パウルがすぐにその場から逃げ出してしまったのは一体なぜ？本作にはそんなパウルの兄弟愛やペーターの夫婦愛についても少しだけ触れているので、全編ブルーバックで撮影した“ドイツ表現主義”のお楽しみとは別に、そんな人間ドラマにも注目！

## ■□■歴史映画とホラー・スリラーの二兎を追っているの？■□■

『ヒトラーの贗札』はまさに“実録歴史ミステリー”の傑作だった。それに対して、本作は時代の変革期に直面する人間を描く歴史映画と、連続殺人鬼を追うホラー・スリラー、つまりジャンル映画という2つの側面がある。とりわけ、本作後半は、残忍な殺人事件を見せつける中で、サイコ・スリラー色が濃くなっていく。それはそれでいいのだが、それって下手すると「二兎を追う者は一兎をも得ず」になる危険はないの？

さらに、本作には、当時としては珍しい女性の法医学者として、死体の解剖にあたるテレーザ・ケルナー博士が登場するが、その美人度にビックリ！もちろん、彼女の仕事ぶりの堅実さが本作のキモとなって、本作後半からはおどろおどろしいホラー・スリラーぶりが展開していくわけだが、一方でペーターとテレーザとの恋模様やベッドシーンまで挿入されていくので、それにもビックリ！ステファン・ルツォヴィツキー監督のインタビューによると、本作の脚本はステファン・ルツォヴィツキーを含む3人で練ったそうだが、私の印象では少しストーリーを膨らませすぎたのでは？どちらかという、『ヒトラーの贗札』のように、歴史スリラーに絞った方が良かったのでは？そんな気持ちもあるが、本作は予想以上の面白さだった。度の合わないメガネをかけて読む時の字の歪みは不快なものだが、全編ブルーバック撮影された、敗戦直後のウィーンの街の荒廃ぶり（＝歪み）はかなりのもの。2時間もタップリとそれを目に焼き付けられながら、後半どんどん深まっていくサイコ・スリラー色を味わっていくと、かなり気分が悪くなること間違いなし。しかし、それでも、「この上なく美しく、そして残酷。異形の連続猟奇殺人ミステリー。」と謳われた本作の問題提起や良し！

2023（令和5）年9月21日記